

仙台市在住の中村通さんの妻、伊久子さん
は2013年に認知症の診断を受けた。一
時は「限界だ」と思われた介護生活からど
うトンネルを抜けたか。当事者をサポート
する、夫、医師、介護福祉士の声を追った。



夫
中村通さん (62)
会社員として働き42歳
で独立。商品コンセ
プトの構築をおこなう。
また、東北文化学園大
学と同専門学校で建築
とデザインについて非
常勤講師として教えて
いる。

妻
中村伊久子さん (63)
59歳を機にそれまで働
いていたパート先を退
職。前頭側頭型認知症
の診断を受け、現在「い
ずみの杜診療所」に通
所、デイケアサービ
スを利用している。

実録 「心が通じる」 認知症の人の支え方

●2012年1月
通さん「家内が仕事を辞め
てしばらくして、それまで
ほとんどお酒を飲まなかつ
たのに、毎晩飲むようになって
きました。また、料理は家
内がやっていたのですが、し
てだんだんなくなり、して
も毎日同じ料理ばかり。ま
た、家族に対して暴言を吐
くように。徐々に生活が退
廃的になっていきました」
●13年2月、14年3月
通さん「13年1月に近くの
脳神経内科で家内が『アル
ツハイマー型認知症』との
診断を受けました。そこで
治療を受けていたものの、
家内の様子は悪化してい
きました。家内が一人で買
物に行くと、1時間半くら
い、買い物かごの中に商品
を取ったり戻したり。そし
て、その商品を持って帰っ
てきてしまうこともありま
した。そこで、スーパーの
店員さんに『この人がお
店に来たら連絡をください』
と家内の顔写真と私の連絡
先を書いた紙を渡していま
した。無理に行動をやめさ

せようとしても興奮してし
まって……。また、夜、私
の仕事にこつそり家内が
外へ出かけて、骨折して帰
ってきたことも。仕事でつ
きつきりではいられなかつ
たので大変でした」
●14年4月
通院先の病院では、医
師は伊久さんについて「今
日は何日ですか?」「今
日のご飯は何を食べまし
たか?」……そしていつ
も同じ薬が処方され
る。

市の地域包括支援センター
に相談し、紹介された『い
ずみの杜診療所』に電話で、
家内の状況を相談しまし
た」
電話の後、「いずみの
杜診療所」地域連携室
長であり、介護福祉士の
川井文弘さんが自宅に來
て、通さんがいま困って
いることについてじつじ
つ話を聞いてくれた。そ
の後、伊久さんと通さ
んは同診療所の山崎英樹
医師(清山会医療福祉グ
ループ代表)のもとを訪
れ「前頭側頭型認知症」
の診断を受ける。その診
察はこれまでとは異なっ
ていた。通さんの伊久子
さんの言動に対する「ど
うして、なんでこんなこ
とをするんだ」という疑
問に答えてくれたのだ。

てばかりいるよりずっと
いい。少しずつでも『この変
化って病気のせいかな』と
受け入れてもらえればいい
と思います。伊久さんには
は、健康的な生活パター
ンをつくるためにデイケア
に通うことを日常習慣に取
り入れるよう勧めました」
しかし、当初、伊久
さんはデイケアに通うこ
とを嫌がった。

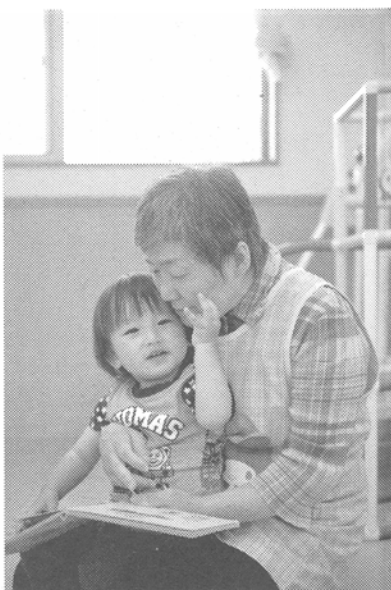
川井さん「来たくない」
『暇』『寂しい』。いろい
ろな思いがあると思います。
でも、ご本人に『デイケア
に来てよかったな』と思っ
てもらうために、まず一つ、
役割でも趣味でも見つけら
れるまでが大切だと考えて
います。その一つが見つか

ることで、ご本人が主体的
にデイケアに通うように変
わっていきます。私たちは
みなさんの居場所づくりの
応援をします」
こうした支援を受けて、
伊久さんの様子も変わ
っていった。デイケアで
伊久さんから職員に
「何か手伝うことはあ
る?」と自ら声をかける
ようになった。

川井さん「手伝うことを通
じてまわりの人から『あり
がとう』と言ってもらえる
ことがうれしかったよう
です。そこから変わってい
くように思いますね」
●15年12月
山崎医師「伊久さんに、
よりご自身の役割を取り戻

してもらうことが大切だと
考えました。そこで、『子
どもが好き』という伊久
さんへ、『こども園』に通
う子どものお世話を勧めま
した」
しばらくすると伊久
さんはデイケアに行く前
にこう話すようになった。
伊久さん「こども園」で
こたろうくんとみずきちゃ
んに会うのが楽しみ。待っ
てくれていたから、いず
みの杜に行きなきゃ」
●16年

前向きに伊久さんが
デイケアに通うようにな
った頃、通さんも自分自
身の変化を感じていた。
通さん「私と家内、どちら
が先に変わったのかわから



「いずみの杜診療所」のデイケアで
毎日1時間、併設されているこども
園に通う子どもたちの世話を
する。この時間が、伊久さんが自身の役
割を取り戻すきっかけとなつた

ないですけどね。家内の様
子に慣れていったこともあ
り、一緒に『育ってきた』
んだと思います。山崎先生
に説明していただいたこと
で、家内の困った言動の原
因はわかった。そこで、私
たちがそれを認めていつ
て変わらなきゃいけないな、
と」

そして、伊久さんに
も変化があった。

通さん「それまでは『さ
んが嫌だ』と言うこともあ
ったのですが、今ではまわ
りに感謝の気持ちを持つて
いるようです。言葉もやさ
しくなり、人が変わったよ
うに思うこともあります」
山崎医師「病気の影響で苦
手な部分はあります。でも、
うまく付き合っていく方法

を見つけていけばいいん
です。また、伊久さんは今、
毎日を楽しみ、そしてい
きがいを感じています。不安
感もない。ご家族やいず
みの杜で出会う人たちの社
会があって、それがうまく
いっていることが一番です。
どう『よりよく生きるか』
が大事です」

最近、通さんは「伊久
子さんと心が通じ合っ
ている」。こう感じるよう
になってきたという。伊
久さんは「毎日がしあ
わせ」と話す。通さんと
伊久さんは、認知症を
通じて、より深い新しい
関係を築いていっている
ようだ。

取材・文/医療健康編集部
加納さゆり

これまでの経過

- 2012年1月
伊久さんがパートを辞める。
- 12年夏頃
伊久さんの様子が変わってくる。
通さんと伊久さんの口論が増えて
いった。
- 13年1月
夕飯を食べて間もなく、伊久さん
が「夕飯の準備をする」と言い出
したのを機に近くの脳神経内科を受
診。「アルツハイマー型認知症」と
の診断を受け、薬を処方された。
- 13年2月～14年3月
通院と薬の服用を続けるが、伊久
さんの状態は悪化。この頃から通
さんと息子さんはかなり疲弊して
いく。
- 14年4月
伊久さんの病状はさらに悪化。
東北文化学園専門学校の介護福祉
科の先生に、伊久さんの状況を相
談。地域包括支援センターへの相
談を勧められる。「いずみの杜診
療所」に電話。同診療所で「前頭
側頭型認知症」の診断を受ける。
- 14年10月
伊久さんが週に4日、同診療所の
デイケアに通い始める。病状の悪
化にともない毎日通うようになった。
- 15年4月
毎日のデイケアを通じて次第に状
態が改善し始める。
- 15年12月
同診療所に併設されている「こども
園」で、伊久さんがお絵かきや散
歩、お遊戯の手伝いなど、子ども
の世話を始める。
- 16年
伊久さんが前向きな気持ちでデ
イケアに通うようになる。